

水曜通信 4

東北学院宗教センター編

2020年
12月

LIFE

LIGHT

LOVE

「一人の学生も迷うことなく」

新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、大学の前期は、連休明けから原則オンライン授業を実施しました。オンライン授業は、大学の教員、学生にとって初めての経験でした。オンライン授業の実施を決断する際に、各学部の学部長から異口同音に「一人の学生も迷うことなく」という言葉が発せられ、これを合言葉にオンライン授業を遂行してきました。この言葉は、「迷い出た羊」を大切にするという聖書の教えを連想させます。「ある人が羊を百匹持っていて、その一匹が迷い出たとすれば、九九匹を山に残しておいて、迷い出た一匹を探しに行かないだろうか。はっきり言うておくと、もしそれを見つけたら、迷わずにいた九九匹より、その一匹のことを喜ぶであろう」（マタイによる福音書18章12-13節）。



東北学院中学校・高等学校
礼拝堂ステンドグラス
「聖なる光」
三浦啓子(1935年生)作



東北学院宗教センター所長（院長・学長） 大西 晴樹

「建学の精神」であるとともに、東北学院の134年にもおよぶキリスト教教育の伝統の中で培われた「個人の尊厳」を大切にできる気風に触れた瞬間でした。

次回：第38回水曜公開礼拝(公開オンライン礼拝)12月16日配信予定

水曜公開礼拝は東北学院ホームページ内東北学院宗教センターページ、または右のQRコードからご覧いただけます。

- 【第1部 礼拝】 説教：松本 宣郎（前理事長・院長）
奏楽：菅原 淑子（本学礼拝オルガニスト）
- 【第2部 オルガン演奏による賛美】
演奏：今井 奈緒子（大学オルガニスト）
奏楽：中川 郁太郎（本学特任准教授）



第37回 水曜公開礼拝報告（説教：大西 晴樹、奏楽：菅原 淑子）

2020年11月18日（水） 公開オンライン礼拝

讃美歌：391番「ナルドの壺ならねど」

聖書：使徒言行録 16章9-10節

説教：「東北を日本のスコットランドへ
—創設者押川方義の学問と信仰—」



【説教要旨】

東北学院の創設者の一人押川方義は、幕末に松山藩の下級武士の子として生まれました。松山藩が明治維新の際に佐幕派であったために、押川は「賊軍」汚名を着せられたのです。英学によって「賊軍」の汚名を晴らすべく、横浜で長老改革派の宣教師に学び、「この国を救いたまえ」という祈りによって回心しました。最初の宣教の地新潟において、エディンバラ医療宣教会派遣宣教師パームの助手として働き、大火の後に仙台を宣教の地としました。その際、パームから与えられた祈りが「東北を日本のスコットランドにせよ」であり、押川は、アメリカ・ドイツ改革教会派遣宣教師に出会い、その祈りを実現するために東北学院、宮城学院を建てたのです。（大西 晴樹）

前奏：Georg Böhm (1661-1773) Choralarbeiten "Vater unser im Himmelreich"

後奏：Georg Böhm (1661-1773) Präludium, Fuge und Postludium in g-moll

パームは当時イタリアオペラが流行していたハンプルクに学び、その後、フランス宮廷音楽が盛んなリユーネブルクで活躍したことから、彼の作風は、フランスとイタリアの両スタイルの影響が見られます。この曲は、ルター派の有名な「主の祈り」による賛美歌の主題が用いられ、フランス風の豊かな装飾音が纏われています。3部構成からなり、繊細さとダイナミックさの2つの要素を兼ね揃えた魅力ある作品です。



（礼拝オルガニスト 菅原 淑子）

礼拝後、音楽による賛美（演奏：菅原淑子）

Olivier Messiaen (1908-1992)

La Nativité du Seigneur: IX. Dieu parmi nous

フランスが生んだ20世紀最大の作曲家・オリヴィエ・メシアンは、敬虔なカトリック信者であり61年もの長きに渡り、パリの聖トリニテ教会のオルガニストをつとめ、数多くのオルガン作品を残しました。この曲は、1935年に作曲された「主の降誕」（全9曲）の終曲で、メシアン自身、9曲を「三連画」として構成したと述べています。下記は聖書のなかの引用文です。「聖体拝受した者、聖母、教会のすべての言葉『私を創った方は、私の幕屋の中に休んでおられる。御言葉は肉体となり、私のうちに宿った。私の魂は主を称え、私の霊は救世主なる神のうちで喜びにふるえる。』（集会の書、ヨハネによる福音書、ルカによる福音書）。「音と色彩の使徒」と言われるメシアンの神秘的音楽の輝きが、神への讚美とともに壮大に描き出されています。（菅原 淑子）



東北学院の草創期 (3) 「だれが? ②」



六人の生徒と教師

ホーイの手紙には、7人目として橋本宗之進(23歳)の名前も出て来ますが、右の写真はランカスター神学校での資料調査の際に初めて見付かりました。しかし、東北学院の卒業生名簿には、神学部卒業生として高貫(第1回)と田村(第3回)が記録されているだけです。高貫は当時の授業の様子について、次のように回顧しています。

「ホーイ先生のヨハネ伝の講義を押川先生が訳して聞かせる。けれども訳がまずいのか、言うことが六ヶ敷い(むつかしい)のかさっぱりわれわれには理解できなかった。それでがくりがくり居眠りをしてしまう。」
(東北学院史資料センター 日野 哲)



橋本宗之進

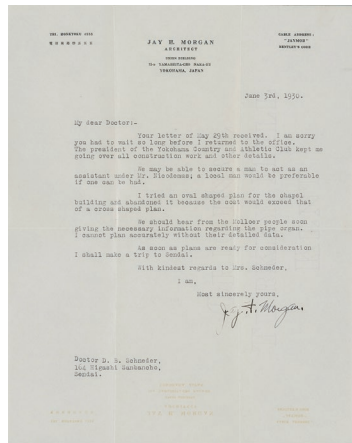
最初の生徒は「だれか」について、ホーイは創立1年後(1887年)7月の手紙で7人の名前と年齢を報告しています。生徒の出入りも自由な私塾であったので、従来から言われている「最初の生徒は6人」という時期もあったと思われます。左の写真はそれを裏付けるものですが、名前も判明しており、右から順に次のとおりです(年齢はホーイの報告による)。

安部次次郎(20歳)、田村兼哉(19歳)、西堀幸八(32歳)、松田順平(23歳)、高貫兵太夫(20歳)、早坂千三郎(24歳)

一 建築との対話：礼拝堂建築調査の現場から (10) 一

建築家モーガンがシュネーダー院長に宛てて送った1通の手紙を紹介します(右図)。1930(昭和5)年6月3日に横浜から送られたその手紙は、シュネーダー院長からの往信に対するモーガンからの返信です。时期的には、モーガンが礼拝堂の設計業務を受諾してから概ね1ヶ月後、礼拝堂の竣工から考えれば2年前ということになります。

建築に関し、2つの記述があります。一つは、モーガンは礼拝堂に楕円形(“oval shaped plan”)を用いることを検討したものの、費用の観点からラテン十字型に妥当性を見出したと説明している点。いま一つは、設計案を詰める上で、モーラー社とパイプオルガンに関して打ち合わせをすることが必要であると述べている点です。モーラー社製のパイプオルガンについては、書き振りから考えてシュネーダー院長の発案だったのでしょうか。一方、楕円を用いた礼拝堂案。これは手掛かりが他に残っていないため発案者も含めて詳細は不明です。しかしながら、モーガンはしばしばコスト規模の異なる複数案を並べて、設計を進めていたようです。ちなみに正門でも現在の姿とは異なる案があり、これは図面が残っています。もし礼拝堂が楕円形だったら…そんなことを想像させる、興味深い手紙です。
(工学部 崎山 俊雄)

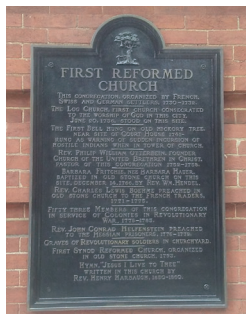


モーガンからシュネーダー院長への手紙
(1930年6月3日付)

「ランカスター神学校の思い出」(2)「ランカスターの第一改革派教会」

ランカスターのダウンタウンの一角には、第一改革派教会（First Reformed Church）があります。同教会は、今日では、UCC (the United Church of Christ) に属していますが、ランカスター神学校と同様にドイツ改革派教会のルーツを持っています。

第一改革派教会は、歴史ある教会であり、その起源は1730年代にさかのぼります。興味深いのは、歴代の著名な牧師として、フィリップ・W.オッターバイン（Philip William Otterbein:1726-1813）とヘンリー・ハーバウ（Henry Harbaugh:1817-67）の名前が挙げられていることです。



両者は共にドイツ改革派の牧師でしたが、オッターバインは、リヴァイヴァルの影響を受け、後に同胞教会（The United Brethren in Christ）という独自の分派（セクト）を創設したことで知られています。一方、ハーバウは、私たちにもなじみ深い讃美歌361番『主にありてぞ』（原題：Jesus, I live to thee）の作詞者であると同時に、ネヴィンやシャフらの同僚としてマーサーズバーグ神学を推進した人物でした。分派を結成したオッターバインと、その分派を徹底的に批判したマーサーズバーグ神学に関係の深かったハーバウ。時代が異なるとはいえ、正反対の神学的立場に立つ二人が、牧師を務めていたことに、第一改革派教会の持つ歴史の深みを感じます。

(文学部 藤野 雄大)

美術による賛美 (1)



学院のラーハウザー記念東北学院礼拝堂は1932年の献堂。その正面に設置された「昇天」を描くステンドグラスはイギリス製ということでは伝わっていましたが、詳細は不明でした。しかしステンドグラスの左下端に制作した工房の銘文が残っていて（下図）、19世紀イギリスのゴシック復興の指導的な工房であるロンドンのヒートン・バトラー＆バイン（Heaton Butler & Bayne）工房の重要な作品であることがわかりました。2016年のことです。それを機に研究が可能となり80数年ぶりの洗浄修復も実施されました。

ステンドグラスは時の院長シュネーダー先生の選択でした。近代キリスト教の中世復興の例が身近にあつて、そこから新約の人間主義のキリスト教を支えている旧約の神中心主義につながることは、日本の近代キリスト教の射程を西洋中世にまで広げる意義深いものです。

(文学部 鐸木 道剛)



いのち

ひかり

あい

東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE (いのち・ひかり・あい)

東北学院宗教センター編「水曜通信」
第4号

2020年12月4日発行

〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1

発行責任者：宗教センター主任 野村信

編集協力者：鐸木道剛

東北学院宗教センター TEL：022-264-6558

Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp